

ヒルフェ通信(9月号)

❀ そっと寄り添いやさしくサポート ❀

「公益社団法人成年後見支援センターヒルフェ」は高齢者、精神障がい者、知的障がい者等の権利の擁護及び福祉の増進に寄与することを目的として、東京都行政書士会が設立した法人です。



今、コロナ感染拡大防止を受け、生活行動制限が日常的になされており、1日1回の散歩を楽しみにしていた人、ご近所の人とのたわいなしなおしゃべりを楽しみに暮らしていた人、配食サービス利用のお弁当でさえ玄関先に置かれたまま…。独居で自立していた方でさえ、精神的・肉体的ダメージが多く、高齢者等にもたらす影響は数知れず、だんだん社会との繋がりが薄くなってきています。

そして、お元気な方でさえ、そのような状態が認知症の初期症状となって表れてきていると地域のお医者様や民生委員さんからのお話もあります。

一日も早く前の生活に戻れるように、コロナ感染拡大の終息を願うばかりです。

成年後見制度利用促進法によりご本人の意思決定の重要性に焦点があてられ、その支援が義務付けられました。まさに、ヒルフェの事業目的でもあります民法858条が活かされるところです。

ヒルフェ会員は一昨年より数回、意思決定支援の研修を受講しております。

今一度、根本的な認知症の人の気持ちに寄り添えるために、そしてヒルフェ会員でない皆様にも、ご自身のご家族や身の回りの方がそのような状態になったときに、少しでもご本人の気持ちがわかるよう、今後、ヒルフェ通信でシリーズで解り易くお示し致します。

◆みんなで知ろうシリーズ【1】

認知症への理解～ 認知症の人の気持ち、あなたにわかりますか？

* 自分を失っていく不安と恐怖

認知症はひどい物忘れがひとつの特徴です。ものを置いた場所を忘れて家中を探し回り、探しながらも「あれ？私は今何をしていたの？」と行為そのものがわからなくなったりします。失くした物も(財布・通帳・ハンコ・携帯電話・保険証・郵便物・鍵・腕時計…)本人にとっては大事なもののほど失くさると思う。

「何だろう？」「どうしちゃったかな？」「疲れのせい？」「もう年かな？」



* 困惑 ～ 日常生活に困ることが起こる

記憶・認識・判断・推理・学習能力が低下し、物忘れ以外にもさまざまな「困ったこと」が起こり始めます。自分だけではなく、周囲への迷惑やトラブルにつながることもあります。

・文字や数字がわからない 漢字を忘れてしまい、自分の名前も書けなくなり、しだいにカタカナ・ひらがなも読めなくなることがあります。新聞は読めるのに自分の手で文字が書けない人、ワープロは使えるけれども変換した漢字が正しいかどうかわからない人など、文字の読み書きに苦労します。文字の意味が解らない場合もあり、人それぞれです。

また、レジの支払いで小銭の判別が出来ず、精算がもたついたり、買い物の額にあった適切なお金を用意することも出来ません。

・本人の戸惑い… 「会う約束をしていた？」「約束は今日だけ？」「私が忘れたの？」「怒っているのは誰？」

認知症の人の脳は、容量が小さく、働きにくい状態になっています。そのために、的確な状況判断が出来ず、失敗を繰り返すことが多くなっているのです。

道順がわからなくなって家族に迎えに来てもらい「周囲に迷惑をかけた」と悩むこともあります。本人にとっては身に覚えがないのも確かなのです。

他人とトラブルを起こすことに驚き、自分でもどうにもならない状況に困惑してしまいます。